

今回の短期在外研究の目的は大きくとらえると 2 つの側面を持っていた。1 つはかねてからの研究対象であるアメリカ文化・社会とアメリカ人への理解を、同じく移民から成り立っていて、英語を主に使用するカナダという隣国との比較から捉えてみようということであった。ヨーロッパからの移民たちによって、先住民を駆逐していく中で建国された北米大陸のアメリカとカナダという 2 つの国の類似する部分と相違する部分を考察することで、アメリカの特異性を浮かび上がらせたいという思いがあった。

もう 1 つの側面は、筆者にとって初めての長期異文化体験の場であり、異文化との出会いの原点であるカナダにおいて約半年間というまとまった時間を過ごすことを通して、筆者にとってのもう一つの大きなテーマである文化と個人の関係について熟考してみたいということであった。この短期在外研究ではトロントで約半年間過ごすというものであったが、筆者の初めての異文化体験は 50 年近く前のモンリオールでの 1 年間であった。フランス語が強い地域であるケベック州のモンリオールと英語が主であるオンタリオ州のトロントという地理的な相違と、約 50 年前と現在という時間軸上の相違はあるものの、この課題についての本質的な問題について考察することは筆者にとって大きな意味があると考えられた。このような機会はないかもしれないという思いがあり、こういう機会を与えていただいたことをとても感謝したい気持ちである。

今回はオンタリオ州のトロントのダウンタウンに滞在し、主としてトロントの中心部とダウンタウンでのフィールドワークに時間を費やした。一般的なアメリカの都市と比較して、カナダの都市は比較的安全であるという事情もあり、できる限り足を使ってくまなく街を見て回ることができたことは幸いだった。その結果、トロントでは非常に多くの人々が街を歩いている、しかもかなり長距離を歩いていることを経験的に発見することができた。アメリカの地方都市では歩いている人が非常に少なく、人々は短距離であっても車を使用して移動するのが一般的であることを考えると、これはアメリカと異なる点として興味深かった。もちろんニューヨークなどの大都市では歩く人も多いが、安全上の心配がある点がトロントとは異なると思った。またトロントの街はあちらこちらにゴミ箱が設置されていることが、あちらこちらでゴミ箱が撤去されている日本とは異なる点として心に残った。また、地下街の広さと清潔さもアメリカとは異なる点として目についた。この清潔さは日本に近いものを感じた。また、地下鉄は路線も少なく、カバーする地域も狭いが、ニューヨークの地下鉄よりは安全で綺麗だという印象を持った。全体的に見て、安全で徒歩で移動が可能な歩ける街というのがトロントの特徴と言えるだろう。

さらに、通りや公園、地下鉄の駅などの名称に Queen や King、duke や prince、Balmoral や Windsor 等という語が結構含まれていることにイギリスへの心理的な近さを感じられ、それもアメリカとは異なると感じた。筆者が 5 年間暮らしたロサンゼルスでは通りの名称にスペイン語の地名が多くあったが、これも地理的・文化的な近さを示すものであったと思っている。カナダの公用語は英語とフランス語であり、ケベックを除く多くの州では英語が使用されているが、カナダ国内のフランス語圏であるケベック州のモンリオールでは、フランス語が公用語であるため、街中の通りの名前には英語とフランス語が併記されている。

また、トロント大学のシステムがアメリカの大学よりもイギリスの大学のシステムに近いこ

とも、カナダのイギリス文化への距離の近さを示す証拠と思われた。もちろん、カナダはイギリス連邦加盟国であり、国家元首は現在のイギリス国王でもあるチャールズ三世であることを考えると当然のことかもしれない。カナダが文化的にも政治的にもイギリスとアメリカの中間に位置するととらえるのが自然であろう。Governor General of Canada (カナダ総督)はカナダの国家元首であるカナダ国王、つまりイギリス国王、の代理という重要な役職でこれまでイギリス系白人男性のみが就任していたが、2021年に初めて先住民の血を引くカナダ人女性 Mary Simon がカナダ総督に就任した。カナダという国が先住民をその重要な一部として認識している、もしくは認識しようと努めていることの証と捉えられよう。また、トロント大学 (The University of Toronto)の Convocation ceremonies (卒業式のセレモニー)においては、先住民との和解のシンボルとして先住民の文化を常に加えていることもアメリカの大学との相違点だと感じた。アメリカもカナダ同様、先住民との問題を抱えているが、その解決を探るための対処方法とプロセスもこの2国の間では異なっていると思った。

トロントは2SLGBTQ+ (Two-Spirit, Lesbian, Gay, Bisexual, Transgender, Queer or Questioning, and other sexual identities)に寛容な姿勢を示す都市で、毎年6月には北米最大級のPride Eventが開催される。今年6月25日のPride Parade (プライドパレード)には240万人が来場したとのことで、ダウントウンの一角gay townから出発するパレードを実際に筆者も見学したが、多くの人々がフラッグを振って応援して楽しんでおり、あまりにも多い人出のため歩道が詰まって歩けない状態のところもあった。トルドー首相も参加しており、トロントだけでなくバンクーバーでもプライドパレードが開催されているカナダは、LGBTQ先進国だと言えるだろう。アメリカにおいても毎年6月をLGBTQプライド月間として、LGBTQの権利向上を目指す啓蒙に取り組んでいる。しかし、近年、特にアメリカにおいてはバックラッシュによって反LGBTQ州法や条例が、特に南部の保守的な州において2023年前半に顕著に増加したとの報告もある。カナダ政府はアメリカへ旅行に行くLGBTQのカナダ人に対してリスクを警告し、事前にアメリカの州法などをチェックするように注意喚起している。

この6月にはトロント市長選挙があり、初めてアジア系女性のトロント市長が誕生した。最終的な公開討論会には6人の候補者が登壇し、テレビでも放送されたが、そのうち3人が女性(白人・黒人・アジア系)で、有力候補のポルトガル生まれと香港生まれの女性たちは移民一世のカナダ人であった。選挙の結果、1970年に13歳で両親と香港から移民してきたOlivia Chow氏が選出された。移民直後に居住したというAnnexやSt. James Townはダウントウンにあり、筆者も頻りに訪れた場所だったが、非常に便利なロケーションで、昨今、人口が急増し、住宅価格が急騰しているトロントでは初期の移民の居住が非常に困難になっている地域だろうと思われた。Annexはトロント大学に近接した静かな住宅地でトロント大学の学生も多く住んでいる地域だった。St. James Townは隣接するCabbagetownとともに中近東出身者が多く居住する地域という印象を持った。Annexとは異なり少し築年数が古めの高層アパートが乱立する地域で、小さな子供を含む家族の居住者が多く散見された。今回の市長選挙における重要な争点の1つが不足する住宅問題だったが、街中でも非常に多くのホームレスが路上に寝ており、人口急増と急激な物価高と合わせてとても困難な問題だと思った。ダウントウンではあちこちで非常にたくさんの高層ビルの建設が現在、進行中であり、その多くが住宅用コンドミニアムをも包含しているようだが、これらの住宅価格は法外に高価であり、一般の市民の手に届くものではな

いと考えられる。一般市民にとって手頃な価格の住宅供給の計画について、これからの Olivia Chow 氏の手腕が試される事態となっている。

初のアジア系女性トロント市長誕生のニュースは、2021 年にアメリカのマサチューセッツ州ボストンで 36 歳の Michelle Wu 氏が初のアジア系女性としてボストン市長に選出されたことを思い起こさせた。Wu 氏はシカゴ生まれで、両親が台湾から移民してきた台湾系アメリカ人二世だが、この選挙活動に筆者の知人のアメリカ人女性が参加していたこともあり興味を持っていた。ボストンもやはり深刻な住宅問題を抱えているが、Wu 氏は現在、果敢にこの問題に取り組んでいる。

カナダでは西海岸のバンクーバーにおいても昨年秋に初のアジア系男性市長が誕生した。中国系カナダ人である Ken Sim 氏は選挙に中国政府からの介入・干渉があったとの疑惑を否定した。トロント市長に選出された Chow 氏も、選挙後になされた、中国政府を支持する団体から支援を受けていたとの報道に対して、その団体についての真実を認識していなかったと述べた。今後、カナダで急増している中国系移民が政治に関わり、政界に進出してくれば、このような疑惑・不信は必ず噴出してくると思われる。すでに他国へ移民して、そのホスト国の国民になっている人々への中国政府の支配やコントロールは全く法外なものと言わざるを得ない。実際問題として、諜報部員の存在の可能性もゼロではないので、そのリスクへの対処もカナダにとっては必要不可欠なものになるだろう。実のところ、近年のカナダの国政総選挙に中国政府の介入があったという疑惑がニュースでも度々取り上げられていた。今後、様々なレベルでの政治・選挙に同様な問題が表出してくると思う。

これは、これまでのアメリカとカナダでの筆者の経験から抱いた印象だが、カナダで働く移民の人々の方が、アメリカにおける移民たちよりも、働くことに喜びを見出している or 一生懸命、ホスト社会であるカナダで生きていこうとしている、ように感じられた。これは、LGBTQ+ の人々へアメリカよりも寛容な姿勢を示すカナダが、多様性をより許容する柔軟さを持っているからかもしれないと感じた。

50 年近く前にロースクールに通っていた、当時まだイギリス領だった香港出身の中国人女性は、その後カナダの弁護士となり、親族を香港から呼び寄せ、カナダ人弁護士としてカナダ社会に貢献した。その彼女が今はリアイアしてカナダで余生を楽しんでいる、と筆者の古いカナダ人の友人から聞いた時、他国へ移民するということはこういうことであるべきではないかと思った。移民の国であるカナダは、今後、急増する新たな移民たちとともに急激に変化していくことを余儀なくされると予測されるが、移民のあり方について、日本はこの国から学ぶものが多くあるだろうと感じている。